

【歴史認識再考①】

今、歴史教育を考える

新しい歴史教科書をつくる会
会長 杉原誠四郎氏 インタビュー

根拠の無い嘘の事実によって日本人の名誉が傷つけられているという現状を見過ごすわけにはいきません。我々の次の世代を考えても日本を悪く捉えるような教育は考え直した方がいいですよね。」

安倍政権発足以降、自民党の教育再生実行本部特別部会では「自虐的な」歴史観見直しを始め、歴史教育のあり方に関する議論が行われている。歴史教育はどうあるべきか。設立以来、日本人に愛国心を育むことを目的として教科書を制作してきた「新しい歴史教科書をつくる会」の会長である杉原誠四郎氏にお話を伺った。

これまでの歴史教育にどのような問題点があるとお考えですか。

「歴史というのは、究極的に言えば主観であり、人によって認識が違うことはまず頭に入れておかなければなりません。そしてまず日本が戦争に負け、その宿命を背負っていることも理解しなければなりませんよね。しかしだからといって嘘の事実までを教えるというのは間違っています。知識人には正しい歴史を教えていく使命があると考えています。今の歴史教育に見られる

具体的に嘘の事実とは。

「例えば『南京事件』というのはなかった事件であり、これは完全に証明されているのです。南京の記念館で展示されている写真は合成されたり、キャプションを変えられたりして、全て後から作られたものののです。トルーマン政権時代のアメリカが原爆を落とし、その一ヶ月後にマーシャル陸軍参謀総長が原爆を落とした理由について述べた際、真珠湾攻撃という日本による先制攻撃を挙げたのですが、そこに『南京事件』は入っていませんでした。連合国側はアメリカの東京空襲、原爆投下など明らかな国際法違反行為に匹敵する日本側の残虐行為を必要としたのです。『南京事件』というのはこのような経緯の中で創作され、それを中国は外交手段として利用しています。中国側は、中国国内で起きた残虐行為を全て日本軍がしたかのように主張し、それを教科書に記載させるということ

となったのです。

韓国が主張する従軍慰安婦問題もまた同じです。『強制連行』という主張や認識が広まっていますが、そのような事実は全くありません。慰安婦は現地で高級将校よりも収入が高く、強制する必要などなかった。もともと、個々人の事情で慰安婦として働かざるを得なくなり、不幸であった場合もあります。しかしそれでも、日本軍の『強制連行』という事実はない。それにもかかわらずと教科書にはそのように記載されているのです。」

私たちは、自虐史観に満ちた歴史教育を受けてきたという感覚がないのですが。

「それでも『南京事件』や『強制連行』という記述が教科書にあったのではないですか。先にも述べましたが、そのような出来事がなかったにもかかわらず、どうして記述されなければならないのですか。

これには、日本の学者にも責任があると私は考えています。歴史の教科書をつくっているのは学者です。日本の学者は、自分の学説が否定されることを嫌がる傾向にある。本来、歴史において新しい説が生まれることは学問の発展につながるものであって、喜ばしいことです。それにも拘わらず、新たに出てきた説を受け入れよ

うとしない体質が、日本の学界にはあるのです。」



市ヶ谷の私学会館にて。

自虐史観見直しがアジア諸国の反発を招くことへの配慮は必要ないのでしょか。

「自分の国のことに関して他国に口出しされても、それにいちいち配慮する必要なんてないと思います。そもそも、『アジア諸国』と言いますが、反発しているのは中国と韓国だけです。それにこれらの国々は国内事情を理由に日本の歴史認識非難を外交カードとして使っているのです。インドネシア、ミャンマーなどはむしろ親日なんです。特にインドネシアではオランダ

に対する独立戦争において、日本の兵士が現地に残ってインドネシア側に付いて戦いに加わったという事実もありました。ベトナムなどもそうです。このため、インドネシアでは日本に好感を持つ人々が多いんです。太平洋戦争で日本は東アジアを欧米列強から解放したというのは、後から付け加えた戦争目的のようなどころもありますが、結果として解放したと言う事はできるのではないのでしょうか。

韓国や台湾は『植民地化』という言葉を使いたがりますが、日本の植民地化政策は欧米諸国がやるものとはまったく違いました。日本は韓国や台湾から搾取したのではなく、日本と同じくらいの国力をつけ、同じような国家になってほしいという狙いがあったんです。そのため、様々な制度を『強制』して国としての整備を図ったんですよ。最も、この『強制』ということ自体が誇り高い国からすると傷となったのでしょうか。

あなたたちが『アジア諸国の反発』と捉えていることがもうすでに歴史教育が歪められているということなんです。敗戦国として歴史教育では不利な事実が並び立てられています。なぜ日本の良さをきちっと表現できないのか、そして表現できるだけの情報を持っていないのか。そういうことにおいて日本の歴史教育は歴史教育と

しての本当の課題を果たしていないのです。

もっとも、自虐史観を見直すということが、他国を貶めるような教育に繋がってはいけません。日本と他国との比較において、事実を捏造するのではなく、明確な事実を比較することが大切です。」

杉原先生が実際に大学で教鞭をとる中で、これまでの歴史教育の弊害というのを感じた事はありますか。

「この点についてよく言われる話があります。海外にいる日本人留学生が現地の学生や他の国々から来た留学生などと交流する際、日本の学生は自分の国の良さを語らない傾向があります。一方で、他国からの留学生は自分の国の自慢をする。日本の学生は自分の国を悪いと思っているわけではない場合でも日本がどういう風に見えるのかを言えないのです。日本はこういう特色があつてこういうことにおいて自慢できる、ということを経史教育のまゝとめとして教えてないということではないでしょうか。

例えば日本には武士道に見られる潔さや情け深さという誇り高い文化があります。江戸時代の識字率も当時世界一と言えるほど高かったのです。しかし、なぜそのような文化が育まれてきたかを説明できるような教育を子供達は受け

てきていません。

皆さんも、もし外国人に日本の良さを聞かれ
たら答えられますか。すぐに表現ができないで
しょう。何もよそに対して威張る必要はない。
優れた文化を持つているのにそれを口に出して
言えないという点で日本の歴史教育は本来の課
題を果たしていないと言えますね。」

**では、我々のように義務教育を終えた人たちに
対してはどのようなアプローチをお考えですか。**

「それに関しては、私たちは歴史講座というも
のを半年ごとに開講しています。ここでの狙い
は、誇るべき日本の歴史を把握してもらおうと
いうものです。義務教育を終えた方々にはこの
ようなイベントを開いて、我々の歴史認識を伝
えていきます。」

つくる会が目指す歴史教育とは。

「皆さんも自分のことを考えたとき多少なりと
もプライドというものがあるでしょう。人に言
えないような恥ずかしい事も経験していると思
います。そのような人に言えない部分は過ちと
して、人に見せる場合は全体として良いように
見せようと思います。それと同じように
社会というものが健全であるために自分の存在
に誇りを持てる状況が必要なのです。歴史教育

によってその誇りを表現できるようにしてやら
なければなりません。今の状況では、それがで
きていません。つくる会は、子供たちが自分の
国に誇りを持てるような教科書で教育すること
を目指しています。」

〈所感〉

私の中には、愛国心は教育で植え付けるもの
なのか、という疑問が常に頭の中にあつた。私
自身は、自虐史観に基づいた歴史教育を受けて
きたという感覚がなく、また自分の住むこの日
本という国を愛する気持ちは持っているつもり
だ。本当に、これまでの歴史教育には問題があ
り、日本の良さを理解させようとするどころか、
自分の国に誇りを持たせないような教育が行わ
れていると言えるのだろうか。この取材を行う
前までは、教育に問題があるとは認識していな
かった。

しかし、今回杉原氏への取材を通じて感じた
のは、自分が学んできた「歴史」を鵜呑みにす
るのではなく、批判的に捉えることも必要なの
ではないかということである。歴史というのは
人によって認識が違うというのは杉原氏もおっ
しゃっていたことであるが、そうであるからこ
そ、教えられたり読んだりして学んだ歴史をそ
のまま信じるのではなく、自分なりの解釈を加

えたりして一つ一つの事実を解釈していかなけ
ればならないと感じた。この考え方は右寄りだ、
左寄りだ、というのではなく、もう一度自分の
歴史認識を振り返ることが必要だ。

(文責 中島和博)

【新しい歴史教科書をつくる会】

○ 平成九年一月三〇日 「新しい歴史教科書
をつくる会」発足。趣意書採択。

○ 平成一七年四月 『改訂版 新しい歴史教科
書』と『新訂版 新しい公民教科書』が検定
に合格。

○ 平成二三年八月 自由社教科書の採択率は
歴史・公民教科書ともに1%も達成せず、
目標を大きく下回った。

杉原誠四郎

すぎはらせいしろう

昭和42年東京大学大学院教
育学研究科修士課程修了。城西
大学教授、武蔵野大学教授、帝
京平成大学教授歴任。現在、「新
しい歴史教科書をつくる会」会
長。著作『新教育基本法の意義
と本質』、『外務省の罪を問う』
など。